

「侍Japan」がWBC (World Classic Baseball) を連覇しました。正岡子規が日本新聞社の1896年(明治29年)「ベースボール」という随筆を載せてから113年目の快挙です。何しろ、WBCの優勝記録には、現在、日本の名以外無いということですから。

確かに、アメリカをはじめとするメジャーリーガーにとっては、春先のキャンプ中に開催されるこの大会に、積極的に辛いことではあると思いますが、開催を提唱したのはアメリカであるのを忘れないで欲しいと思います。また、日本プロ野球も同じ条件です。

米大リーグを代表する左腕、メッツのヨハン・サンタナ投手が、WBCはシーズン終了後に開催するべきだと語ったニュースがありましたが、決勝の日韓戦を観て、野球をやっている選手にとって、自分も出たいと思うのでしょうか。

シーズン前の春先に「2週間で準備しろというのは無理」、「シーズン後は疲れ切っていることは分かるが、WBCはプレーオフのような雰囲気があるし、選手も全力を尽くさだろう」というのが、メジャーリーガーにも分かってきたようですね。日本の野球少年と同じ思いなのでしょう。

正岡子規の「ベースボール」の行にある、

「ベースボールに至りてはこれを行う者極めて少くこれを知る人の区域も甚(はなは)だ狭(せま)かりしが近時第一高等学校と在横浜米人との間に仕合(マッチ)ありしより以来ベースボールという語ははしなく世人の耳に入りたり。されどもベースボールの何たるやはほとんどこれを知る人なかるべし。ベースボールはもと亜米利加(アメリカ)合衆国の国技とも称すべきものにしてその遊技の国民一般に賞玩(しょうがん)せらるるはあたかも我邦(わがくに)の相撲(すもう)、西班牙(スペイン)の闘牛(とうぎゅう)などにも類せりとか聞きぬ。《米人のわれに負けたるをくやしがりて幾度(いくど)も仕合を挑む(いど)むはほとんど国辱(こくじょく)とも思えばなるべし》」

は、これは明治の草野球のことでしょうが、今回も、野球発祥地のアメリカが、WBC決勝を戦えなかったことに対するアメリカ・ベースボール関係者の気持、そのものでしょう。

しかし、アメリカは移民に寛容な国であることもあってか、マスコミは、「決勝を見たならば、米国がなぜ勝てなかったのかなど、どうでもよくなってしまふ。」などと大人の対応が目立ちます。

最後に、子規が野球の語源「野ボール(野球)」と呼んだように、誰が言ったか分かりませんが、「侍Japan」、これも子規の野球好きを知っている人が、子規の「ベースボール」のベースボールの勝負の行

「攻者(防禦者の敵)は一人ずつ本基(ホームベース)より発して各基(ベース)を通過し再び本基に帰るを務めとす、かくして帰りたる者を廻了(ホームイン)という。ベースボールの勝敗は九勝負終りたる後ち、各組廻了の数の総計を比較し多き方を勝とするなり。

例えば「八に対する二十三の勝」というのは乙組の廻了の数八甲組廻了の数二十三にして甲組の勝なりという意なり。されば競技者の任務を言えば攻者（こうしゃ）の地に立つ時はなるべく廻了の数を多からしめんとし、防者（ぼうしゃ）の地に立つ時はなるべく敵の廻了の数を少からしめんとするにあり。廻了というは正方形を一周することなれどもその間には第一基（ベース）第二基第三基等の関門あり各関門には番人（第一基は第一基人これを守る第二第三皆（みな）しかり）あるをもって容易に通過すること能（あた）わざる也（なり）。走者（ランナー：通過しつつある者）ある事情のもとに通過の権利を失うを除外（アウト）という。（普通に殺されるという）審判官（アムパイア）除外と呼ばば走者（または打者（ストライカー））は直（ただ）ちに線外に出（い）でて後方の控所（ひかえじょ）に入らざるべからず。除外三人に及べばその半勝負は終るなり。故に攻者は除外三人に及ばざる内に多く廻了（ホームイン）せんとし防者は廻了者を生ぜざる内に三人の除外者を生ぜしめんとす。除外三人に及べば防者代りて攻者となり攻者代りて防者となる。かくのごとくして再び除外三人を生ずればすなわち第一小勝負（イニング）終る。かれ攻（せ）めこれ防ぎおのおの防ぐ事九度、攻むる事九度に及びて全勝負（ゲーム）終る。」

から、戦（いくさ） 武士、侍ということが頭に浮かんだ結果のような気がします。

兎に角、経済効果500～600億円と云われている「侍 Japan」のWBC 連覇、不景気な日本を、気持だけでなく、経済的にもちょっとした間元気にしたようです。

朝日：「WBC決勝、視聴率は36.4%」(3/25)

24日にTBS系で放送されたワールド・ベースボール・クラシック（WBC）決勝、日本 韓国戦の世帯視聴率は36.4%（関東地区、ビデオリサーチ調べ）だった。

WBCの同地区での放送では、20日の第2ラウンド韓国戦の40.1%（TBS系）7日の第1ラウンド韓国戦の37.8%（テレビ朝日系）に次ぐ数字だった。関西地区は36.5%、名古屋地区は34.4%、北部九州地区は40.6%、札幌地区は45.0%だった。



<http://www.npb.or.jp/wbc/>

< 正岡子規 (1867-1902) >

俳人、歌人。

俳句・短歌・新体詩・小説・評論・随筆など多方面に渡り創作活動を行い、日本の近代文学に多大な影響を及ぼした、明治時代を代表する文学者の一人である。



子規は日本に野球が導入された最初の頃の熱心な選手でもあり、明治 22 年（1889 年）に喀血してやめるまでやっていた。ポジションは捕手であった。自身の幼名である「升（のぼる）」にちなんで、「野球（のぼーる）」という雅号を用いたこともある。

また「まり投げて見たき広場や春の草」「九つの人九つのをしめてベースボールの始まらんとす」などと野球に関係のある句や歌を詠むなどしており、野球の普及に貢献したとして平成 14 年（2002 年）野球殿堂入りを果たした。

死を迎えるまでの約 7 年間、結核を患い、「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」「をとゝひのへちまの水も取らざりき」という辞世の句を残している。子規の忌日 9 月 19 日を「糸瓜忌」、雅号の一つから「獺祭（だっさい）忌」ともいう。

春秋：「もう1人のイチロー」(3/25)

仕事が手につかない人も少なくなかっただろう。ワンセグ携帯の小さな画面を眺めて歓声を上げたご同輩もたくさんいたはずだ。野球の面白さを久々に堪能させてくれた、ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)決勝戦である。

延長10回、死闘の末に連覇をもぎ取ったサムライジャパンはたたえて余りあるけれど、韓国ナインの技量とすさまじい粘りにもまた感服してしまう。この国にプロ球団ができたのは1982年だから本格的な野球の歴史は浅い。日本で活躍していた在日コリアンの選手たちが玄界灘を越え、隆盛の基礎をつくった。

そんな縁でもつながらる両チームの激突は本場米国のファンをもうならせたに違いない。5度も同じ顔合わせになるとは妙な具合だが、日韓ともに水準の高さを大に見せつける機会を得たのだと納得しておこう。土壇場でしゃにむに同点に追いついた韓国。それを突き放したイチロー選手の適時打。じつに見事だ。

さて熱戦の余韻に浸っているうちに、もう1人のイチローの話が伝わってきた。巨額献金事件で秘書が起訴された小沢一郎民主党代表の続投表明だ。検察の捜査に疑問は残るにせよ、これがタイムリーな振る舞いなのかどうか。記者会見で涙ぐんでいた小沢さんも、観客席のブーイングをかわすのは容易ではない。

産経：「WBC 日韓は本物のクラシックを繰り広げた 中継局が絶賛」(3/25)

ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)を中継した米スポーツ専門局ESPNは24日、電子版で日本-韓国の試合は、決勝にふさわしい好試合だったと絶賛した。

「日本と韓国は本物の大試合(クラシック)を繰り広げた」との見出しで、選手のプレー、観客の声援のすべてが強い勝利への願望に満ちており、大会開催の意義を問うことが愚かに思えたと報じた。

決勝を見たならば、米国がなぜ勝てなかったのかなど、どうでもよくなってしまおうとしている。



天声人語：「伝説と因縁、すべて共有の財産」(3/25)

冷戦期、アメリカとソ連はあらゆる分野で張り合った。宇宙開発もスポーツも。東西対立の落とし子、西独で開かれた72年のミュンヘン五輪、無敗同士で迎えた男子バスケットボールの決勝は語り草だ。

試合は終了直前、逆転のフリースローが決まって50対49で米国が「勝利」した。ところがソ連の抗議で時計が戻され、残り3秒からの再開となる。ここでゴール下へのロングパスが通り再逆転。五輪で62連勝中だったバスケット発祥国は表彰式に出ず、銀メダルを拒んだ。冷たくて熱い、今は昔の物語だ。

平時の疑似戦争とでもいおうか、国と国との試合は熱しやすい。因縁があればなおさらだ。拮抗(きっこう)する力、国際情勢、過去のしがらみ。一切を薪(まき)にして、負けじの炎が激しく揺れる。

野球の世界一をかけた第2回WBCで、侍たちが2連覇を飾った。実のところ、世界に名を借りた「日韓五番勝負」だった。納めの一戦は、両国民の万感を溶かし込んで燃えた。攻守とも緩みのない延長戦に、仕事が手につかぬ人も多かったろう。

決勝打を放ち、イチローはにこりともしなかった。こちらは仕事師の顔である。敬遠もありえた場面で投手が勝負したのは、打者が「日本代表の代表」だからだろう。シンボルをねじ伏せたいという思いは、センター前にはじき返された。

隣国と好敵手になるのは悪くない。サッカーのブラジルとアルゼンチン、ラグビーの豪州とニュージーランド。意識し合い、互いに強くなった。日韓が戦うたび、伝説と因縁が積み上がる。すべて、共有の財産である。

日経：「米国のWBC敗退 国民的娯楽に大きな打撃 米メディア」(3/23)

野球のワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で22日、米国が準決勝で敗退したことについて、AP通信は「米国の国民的娯楽(野球)は、地元で大きな打撃を受けた」と伝えた。

ロサンゼルス・タイムズ紙(電子版)は「次回までの4年間、米国はどうしたら負けなにか解決策を模索しなければならない」。大リーグの公式ホームページも「決勝に進んだ2チームから、われわれは何か学ぶことがあるはずだ」と、米国の準備と熱意の不足を指摘した。



編集手帳：「あすの真珠たち」(3/25)

通勤の道すがら、中学生の男の子がいる家の前を通る。ここ数日、ガラス戸に立てかけて野球のグラブが置いてある。中にボールを収め、指の部分をゴムひもで結んでいる。

遠い少年の昔、母親の靴下留めを借り、おろしたてのグラブに使いやすく型をなじませたことを懐かしく思い出した。その家の前を通るたび、何かに似ている...と感じつつ、真珠を抱く貝の姿だと気づいたのは、きのう、テレビ機軸でのことである。

あれほど苦しみ、のたうつイチロー選手を知らない。第2回WBCの開幕以来、幾度も好機で凡退する姿には誰しも目を疑っただろう。その人が決勝の韓国戦で“ここぞ”の決定打を放ち、日本連覇の偉業を成し遂げる立役者の一人となった。

痛める貝にのみ真珠は宿る、といわれる。体内に入った異物を核にして、真珠は育つ。天才と呼ばれる人でさえ、過ちと悔いを核にして「痛み」のなかから成長することを、赤く潤んだイチロー選手の目に教えられた。きょうもどこかの空の下で、「へたくそ」の声に傷つき、歯を食いしばって球拾いをする少年がいるだろう。あすの真珠たちに幸あれ。

毎日：「WBC カストロ前議長 日本の練習見習え 敗戦を総括」

【メキシコ市・庭田学】WBC 2次ラウンドで敗退したキューバの革命指導者、フィデル・カストロ前国家評議会議長(82)が19日、キューバ代表の敗戦を総括をする論評を発表。同国の練習方法が遅れているとして、日本を見習う必要があるとした。

カストロ前議長は、今回の敗戦について「我々は過去の栄光にあぐらをかいていた」とし、日本野球の「信じられないほど厳格で整然とした練習」を紹介。「打者は毎日、何百球もの打撃練習をする。投手は1日に400球を投げるのが義務で、試合で失敗すれば、さらに100球多く投げなければならない」と記述した。

明らかに間違った情報も交じっているが、前議長はパワーや爆発力だけでは日本や韓国の「方法論と正確性には対抗できない」と分析。今後について、「技術的、科学的な方法を取り入れ、野球だけでなく、すべてのスポーツで練習方法の革命を起こさなければならない」と主張した。また論評の冒頭で、「キューバはカリブ海の国であるにもかかわらず、し意的に強力なアジア・グループに入れられた。革命の英雄的な抵抗をしてきたキューバを負けさせることが重要だったのだ」と、主催者が不利な組み合わせを行ったと批判した。



余禄：「WBC連覇の球春」(3/25)

日本野球初の国際試合は1896（明治29）年の一高と横浜の外国人クラブとの対戦だが、一高チームの張り切りようはすごかった。相手からの「ナンジニクルカ（何時に来るか）」との問い合わせ電報を「汝、逃ぐるか」と読んで憤慨するいれこみぶりだ。

だから米国人からなる相手チームに大勝した喜びようもただごとではない。祝勝会で寮総代は落涙しながら語った。「きょうの勝利はただ一高のみの勝ちではない。邦人全体の勝ちである。日本がアメリカを征服したのである」（佐山和夫著「明治五年のプレーボール」NHK出版）

こうしてみると国際試合へのやや大げさな気合の入れようは日本野球の生来の性癖らしい。だが今度はまさに掛け値なし、侍ジャパンのWBC連覇達成には「邦人全体」が勝利の喜びにわきたった。日本野球の堂々たる「世界制覇」である。

とくに大会5度目の対戦となった韓国との決勝、その終盤の息詰まるつばぜり合いをイチロー選手のタイムリーで抜け出しての優勝だ。明治この方、野球にかかる思いの強さではどこにもひけをとらぬ日本人にはこたえられない運びだった。

「神が降りてきました」とは決勝打についてのイチロー選手の言葉である。今大会は不調をかこち、最後の最後に栄光の扉を自らの腕で開いたチームリーダーだ。そこに降り立った今大会の神は、パワーのベースボールよりチームワークと技の洗練で勝負する野球を愛してくれた。

世界の頂点を極めた日本野球の雄姿に人々が歓声を送る一方で、甲子園ではもう次の世代の日本野球も始まっている。この国を元気にする野球の力の健在が何ともうれしい球春である。

Searchina：「WBC決勝の日、日本人も仕事をサボる」(3/25)

このブログはWBC決勝が行われた24日、日本で働く中国人が見た、日本のオフィス内の様子を紹介するものである。以下はそのブログより。

米国で開催されていたワールド・ベースボール・クラシック（WBC）に関する報道が巷にあふれ、全ての日本人が野球に熱中していた。日本チームが野球発祥の国、アメリカに勝利して決勝に進出したことにより、日本のサラリーマンたちの話題は自然とWBCに関するものになっていた。

日本のプロ野球選手は驚異的なほどに高収入で、一流選手ともなれば年5億円もざらだという。しかし、米国の野球選手はさらに高収入であるため、日本の一流選手たちは相次いでMLBに移籍している。

そのなかで最も優秀な選手にイチローを挙げることができるが、彼は日本チームの精神的支柱でもある。今大会中、彼はずっと不振であったが、決勝戦では勝利に導く活躍をしたところを見ると、さすがイチローといったところであろう。

さて、決勝が行われた24日、私が働くオフィスでは女性社員の多くが携帯電話を眺めて

いた。何をしているのだろうと思い、私が近づいてみると、彼女たちはメールやネットをしているのではなく、ワンセグでWBC決勝を見ていたのだ。日本人は職務に忠実であり、非常に真面目な勤務態度として有名であるが、この日ばかりは仕事に集中することが出来なかったようである。

